（金のエンジェル賞　中学生の部）

蝉の唄

中二・橋本　一華

――三年前。

この街を、震度七の地震と津波が襲った。

かつて、戦中はこの国で最も武器生産の盛んな街だと謳われ、戦後もその発展は止まることを知らず、背の高いビルや飲食店が立並び、住宅地も拡大されていった。だが、その数十年間の栄光をも嘲笑うかの如く、津波は、地震は、全てを飲みこんでいった。

後に残ったのは、夥しい量の瓦礫に覆われた地面と、黒々とした波の爪痕、そして辛うじて残った死体だけ。

それが、わずか三年前のことである。

この街はまだ、復興したとは到底言えない有様であった。今も尚、瓦礫の撤去や、行方不明者の捜索は続いており、その為、避難所に避難した者の中には、残る者も多かったが、移住していく者も多かった。

そして、街に残った者の子供達は、廃校になったばかりだった、郊外に位置する学校に集まり、また細々と学び始めた。

全校生徒は二十三人。教師は三人。学校とも呼べない、文房具も、教科書も、ノートもない学校。教材は家にあるものを持ち寄って使う。そんなここでは、年齢層もバラバラで、幼稚園児から高校生までの生徒が集まっている。それがこの――…三広末学校だった。

藍原康太は、そんな学校に通う、中学二年生だ。両親は行方不明で、今は、この郊外にある、祖母の家で暮らしている。

ある日のこと。休日に家で過ごしていると、電話が鳴った。ポケットから、スマホを取り出す。
「もしもし」
「あ、康太？　いや実はさ、明日、瓦礫の撤去作業のボランティア行こうと思うんだけど」
この、いきなり要件をぶっ込んでくる話し方は、智弘だ。電話越しのこちらからでも分かるほど、彼は本当に気鬱そうに言った。
「明日って、お前、空いてる？」
「空いてるけど…。どうしたの」
「ほら、俺、目が見えねぇだろ？　先生が、『行くなら誰かと行きなさい』って言って」
ああ、と康太は納得した。智弘は左目が全く見えない。確か、地震が起きたときに、家の窓が割れて、ガラスの破片が目に刺さったから、というのを、一度聞いたことがあった。きっと先生はそれが心配で、「誰かと」と言ったのだろう。電話の向こうで彼が口を尖らせているのを想像して、ちょっと笑った。
「いいよ。俺も暇だし」
「本当？　ありがとう！　いやー、正直言って、お前くらいしか頼める奴いなくて…」
まぁ、あの瓦礫の山はもう見たくない、って奴も多いだろうからな、と言いかけて、やめた。代わりに、近くにあったコップに無造作に麦茶を注いで、一気に飲み干す。
「何時集合？」
「うーん…だったら、九時半からでもいい？　撤去始まんのが、十時だからさ」
「分かった。…あ、撤去作業って、何時まで？　あと、必要なもん

とか」

「終わんのは三時。だから、昼飯作って持って来ておいて。その他の必要なもんは、いつもの手袋とか水筒くらいで大丈夫」

はいはい、と返事するとすぐに、「んじゃ、よろしくな～！」と言う声が聞こえたかと思うと、プツッと電話が切れた。相変わらず、余韻も糞もない。苦笑しながらため息をついて、スマホを置いた。

「──…なんだ、これ」

「…わかんね」

次の日。予定通り瓦礫の撤去作業に勤しんでいた二人だったが、作業中に智弘が、何かにつんのめって転んだ。見れば、一見何もないように見える土の中に、取手のような金属製の金具が覗いている。

「瓦礫が埋まっちまってんじゃねぇの？」

「だったら掘り起こさねぇと」

後々家などが建てられなくなってしまう。二人は、まずは土を除けねばと、手で掘り始めた。みるみるうちに、その全貌が、明らかになっていく。

「…扉？」

鉄の扉があった。錆びた、人一人がやっと通れる程の大きさの扉。よく見ると、扉のまわりは固い土が削れていて、持ち上げようにも、びくともしなかった。

「取手持って持ち上げてみるか」

二人がかりで取手を握り、引っ張る。一体どれ程重いのだろう、と身構えていたから、案外楽に持ち上がったときには驚いた。

──…いや、違う。「開いた」のだ。

ヒュゥゥ、と風の吹き込む音がする。梯子が、真っ黒な穴の底までのびていた。

「…マンホールか何かかな」
さぁ、と返してから、しばらく沈黙が流れる。智弘が言った。
「下りてみねぇ？」
「…はァ？」
正気か、と言いかけたときには、もう智弘は梯子を下り始めていた。困惑しながら、周りを見渡す。幸いここは撤去作業のメインとなる瓦礫の山からは逸れたところにあり、誰も気付いてはいなかった。
こうなったらもうヤケクソだ、と、ため息をつくと、智弘の後を追って、康太は梯子を下りていった。
暫くすると、不意に、智弘の声が聞こえた。
「おーい、康太ーっ」
それが合図であったかのように、今度は小さな光が見えた。下りるにつれ、壁や梯子はその色みを帯びていく。出口か、と思うのと同時に、視界がひらけた。
眩しさに目が慣れてくると、康太はゆっくりと目を開けた。何故か、紙の匂いがする。
そこにあったのは、──…図書館だった。
「あ、来た。遅かったじゃん、大丈夫か」
お前が速すぎんだよ、と言い返すが、智弘は構うことなく言った。
「すごくね？　ココ。なんで地下にこんなでけぇ図書館があるんだろ」
知らねーよ、俺に聞くな、と言いながら、本棚を見る。古びた本は、けれど埃をかぶることもなく、静かにそこに、丁寧に並べられていた。誰かが手入れをしているのだろうか。
本棚はすべて鉄でできているもので、ところどころ歪な形をして

いるが、しっかりとしたものだった。
「何かお探しかい」
声をかけられ、慌てて振り向く。そこには、年老いた男が、杖をついて立っていた。銀縁眼鏡の奥の瞳が細められ、彼は穏やかに笑う。
「生憎、ここには、君たち若者向けの本は置いていないかもしれないが」
「いや、あの…」
違うんです、と言いかけたその時、
「こんにちは！」
と、智弘が元気よく挨拶した。つられて、
「こんにちは」
と、康太も言う。老人はにこにこと
「こんにちは」
と返した。
「ここは…なんですか？」
唐突にそう尋ねる智弘に、老人は笑みを消すことなく、ただ一言
「ついておいで」
と言った。智弘が先に行き、康太も後につづく。
着いたのは、図書館のさらに奥にある、荘厳な雰囲気のある、大きな金庫だった。
銀色の鍵をさすと、カチャ、という心地よい音がして、ずっしりとした扉が、ゆっくりと開く。中には、また一段と古びた本があった。どれも変色して、でもやはり、埃どころか塵一つない。老人は、本を一冊手にとった。
「ここは昔、兵士たちがよく来る図書館だったんだ」

「兵士…って、戦時中の話ですか」
あぁ、と、彼はうなずいた。
「昔は好きな本を好きな時に読むというのは
──…本当に贅沢なことだった」
懐かしそうに、寂しそうに。愛おしそうに。
「情報の全ては、国にとって都合の良いように改竄され、利用された。そんな子供騙しに、私たちは騙されたままだった」
そんな中でできたのが、この図書館だと、彼は振り向いて、二人の顔を見た。
「ここでは、好きな本が、好きなだけ読める。弾圧されることも、圧制されることも、迫害されることもない、理想の図書館だった」
…だが、と、彼はまた言葉を切ると、視線を、手元の本に移した。
それから、笑った。
「ここ数十年、来たのは君達だけだ」
現実世界から少しずれた場所。そこが果たして、安寧の場と言えたのかは分からない。それでも、ここに来る人は、この図書館に何かを求めて、足を運んだのだ。
ではごゆっくりと言って、老人はまた奥へと消えていった。
再び、図書館の棚を見つめる。ふれると、この季節には心地よい、ひんやりとした感触が伝わってきた。それは、地下の涼しさか、それとも鉄の冷たさか。この図書館の重ねてきた、時間が、記憶が、その重みが。一気に自分の指を通って流れこんでくるような気がして──…それが怖くて、手を離した。
しんとした静けさの中に、自分たちの呼吸音だけが響き、その吐息が、ゆっくりととけていく。昔──…数十年前には、ここで大勢の人間が本を読んでいた。それぞれの記憶と時間が、同じように、

この場所にはとけているのだ。二人は、顔を見合わせる。

「――…帰るか」

「だな」

自分たちが、ここにある「それら」を、汚してしまってはいけない。ここは、誰にも見つからないように。誰かが見つける、その時まで。静かに、眠りつづけていればいい。

腕時計を見た智弘が、

「やば、もう四時半じゃん。行くぞ」

と言うまで、康太はぼんやりと、図書館を見つめていた。そして、また梯子を上っていく智弘のあとを追う。

――願わくは。

長い長い蝉の唄が、夏の空に、ゆっくりと、けれどたしかに、響いて、消えていった。

画：黒須高嶺